青山国際政経論集 93 号，2014 年 11 月

書　評

末田清子著
多面的アイデンティティの調整とフェイス（面子）
（ナカニシヤ出版　2012 年）

猿　橋　順　子*

はじめに

本書は，個人がもつ複数のアイデンティティについて，思い入れの違いを生み出すものは何か，言い換えれば，人はどのように複数のアイデンティティを調整しているのかという問いに端を発している。著者は長年にわたる調査からの知見を用いてこの問いに迫る。多面的なアイデンティティの調整について，コミュニケーション学において重要な概念でありながら，相互の関係性については検討の余地を残していた，フェイス（面子），シェイム（shame），プライド（自尊心）の諸概念を用いて仮説構築を試みている。

本書が対象とするのは帰国子女学生および，社会人である元帰国子女である[1)]。1970 年代から 40 年以上にわたり取り組まれてきた帰国子女研究は，もはや研究され尽くしたとの指摘もあるという。

本書は以下の 4 点で，こうした見方を退ける。第 1 に，従来の帰国子女研究が時として陥りがちであった，「帰国子女」というアイデンティティを所与のものとして対象に接近する手法への見直しである。著者は，調査参加者のアイデ

*　青山学院大学国際政治経済学部准教授

1）　帰国子女とは「二十歳以下の日本人で、片親や両親の仕事の都合でそれまでの人生で少なくとも 3 ヶ月以上海外で過ごし，日本の主流の教育制度のなかで勉学を続ける青少年」（p. 45）を指す。

© Aoyama Gakuin University, Society of International Politics, Economics and Communication, 2014

ンティティ調整の流動性に着目するためには，「帰国子女」というカテゴリーをデータ収集段階では無きものとする調査アプローチが重要であると主張する。ただしそれは従来の帰国子女研究を無視するということではなく，それらを十分に概観した上で，調査参加者に向き合う際には一旦脇に置くということである。

第 2 に，アイデンティティ調整のダイナミズムを検討する上での転用可能性である。従来の帰国子女研究では，他のカテゴリーへの転用可能性を十分に視野に入れてこなかった。本書は帰国子女および元帰国子女を調査対象としているが，そこから得られた知見は，他の文脈における複数のアイデンティティ調整にも広く示唆を与えるものとなるよう検討される。

第 3 に，本研究が社会人となった元帰国子女にも着目している点である。従来の帰国子女研究では，帰国児童生徒の教育や支援のあり方を検討する必要性も手伝って，社会人となった元帰国子女への追跡調査は過小であった。本研究はそうした従来の研究の欠落を補うものとなっている。

第 4 に，帰国子女というカテゴリーのイメージに密接に関連する，グローバル化や国際言語としての英語という概念の急速な変化がある。グローバル化や国際言語としての英語をめぐる議論は近年ますます活発になり，従来の理論の見直しや，新たな理論の提案が次々になされている。こうしたグローバル化や国際言語としての英語に対する認識や意味づけ，イメージの変化は，翻って帰国子女のアイデンティティやカテゴリー化，周囲が抱くイメージにも少なからぬ影響を及ぼしていることが類推される。すなわち，私たちの社会がグローバル化といううねりの只中にある以上，帰国子女の研究は継続して行っていく必要があると考えられる。

本書の問題意識は多面的なアイデンティティを調整するメカニズムの解明である。そのための理論的拠り所となる先行研究についてコミュニケーション学はもとより，心理学，精神医学，社会学など隣接学問領域から網羅的に俯瞰している。そこから，複数のアイデンティティを捉えるための理論的枠組みをシンボリック相互作用論，社会的アイデンティティ理論・自己カテゴリー化理論

に定めている。さらに，複数のアイデンティティの調整の諸相を捉えるための枠組みとしてフェイスの概念に着目する。

フェイスは社会学者ゴフマン（Erving Goffman）によって体系化された概念である。人は誰でも「他者に見せようとする社会的に価値のある自己の姿」（p. 21），すなわちフェイスをもっているとする。そして，人は自身あるいは他者のフェイスが脅かされるような事態に直面すると，フェイスを修復しようと「調整」するのである。著者は，フェイスの調整をめぐる先行研究についても，社会学を起点に，コミュニケーション学，社会心理学，言語学と広範な学術領域を横断的に論じている。また，一連の学術的発展を辿るだけではなく，フェイス概念の起源を中国に見，そこから感情との結びつきを提起する。北米中心の研究が見落としてきた情動的側面をアイデンティティ調整の重要な説明概念として浮かび上がらせるのである。

本書は，広範にして精緻な先行研究のレビューを通して導き出された研究設問に基づき，帰国子女および元帰国子女を対象に入念に設計された調査を実施し，綿密な分析を通して得られた知見を纏めている。

本書の構成と概要

本書は序章につづく 7 章で構成されている。第 1 章から第 4 章までは先行研究のレビュー，第 5 章と第 6 章が調査の結果および考察，第 7 章が本研究で得られた知見のまとめとなっている。各章の概要は以下のとおりである。

序章では，研究の出発点と研究の背景が端的に示され，本研究のアプローチおよび研究手法の特徴，研究者の立場，および本書が依拠する理論的枠組みと焦点領域，本書の構成および各章の概要，本研究の成果から得られる示唆が簡潔に述べられている。この導入部において著者は，「帰国子女」を対象とした研究の蓄積について触れながらも，あえて「帰国子女」というカテゴリーにあてはめずに対象者に接近するアプローチの意義を強調している。すなわち「帰国子女であること」から調査をはじめるのではなく，「帰国子女」を含めた複数のアイデンティティのダイナミクスの中から，「帰国子女」性の浮沈を見ること

で，アイデンティティの調整プロセスを抽出するという新たな試みが提示されている。

第 1 章「複数のアイデンティティ」では，アイデンティティという概念について，学術的変遷を俯瞰した上で，本書で扱う「複数のアイデンティティ」(identities) の概念を理論的背景とともに示し，さらなる研究の余地を検討する。アイデンティティという概念を学問的に確立した心理学者のエリクソン（Erik Homburger Erikson）は，アイデンティティを一貫性や連続性を志向するものと捉えた。この見方はアイデンティティを英語の場合，「identity」と単数で表記するところに端的に表れている。

後の社会学者や心理社会学者はアイデンティティを「identities」というように複数で捉えることを主唱する。アイデンティティを役割の遂行に見たシンボリック相互作用論者に対し，社会的アイデンティティ理論の提唱者は，何らかの社会的集団に所属することでアイデンティティが生じるとした。社会的アイデンティティ理論から派生した自己カテゴリー化理論では，集団間のコンフリクトが大きくなる際には，コンフリクトを回避するためにカテゴリーを際立たせなくしたり，個人が肯定的な自己概念を保とうとする際に，カテゴリーの境界を引き直す，といった調整の側面があることを明らかにしている。また，人々が複数のアイデンティティを調整することについては，その人が置かれた状況における顕著さに加え，自尊心や脅威感などの情動面との密接な関係が指摘されている。ただし，実際に人が，どのように複数のアイデンティティを調整しているのかという流動的なプロセスについてはまだ十分に明らかにされているとは言えない。

第 2 章「コミュニケーション学におけるフェイス研究」では，アイデンティティと密接な関係があり，場合によっては同義に扱われることもあるフェイスをめぐる先行研究を概観している。コミュニケーション学者のティン・トゥーミー（Stella Ting-Toomey）はフェイスを「他者に見せようとする社会的に価値のある自己の姿」(p. 21) と定義づけた。フェイスそのものはある程度普遍的に存在すると考えられているが，人がどのようなフェイスを志向するか，コンフ

リクトが生じた場合，それをどのように解決するかについて，これまでは主に文化的志向からの説明が行われてきた。一方で文化的志向だけでは説明ができない局面も報告されており，まだ検討の余地がある。

また，リンとバワーズ（Tae-Seop Lim & John Waite Bowers）はフェイスについて，親和フェイス，能力フェイス，自律フェイスの三類型を提示した。親和フェイスは周囲と和すること，能力フェイスは周囲から能力を認められること，自律フェイスは自己のテリトリーや尊厳の主張と関わっているとされ，コミュニケーション場面ではこの 3 領域のバランスをいかにとるかが重要だという。さらに著者は，これら主に北米で議論されてきたフェイスの起源とも言われ，日本の面子の由来でもある中国の臉（lian）と面（mian）について，通史的に概観していく。そのなかで，ある時期において感情と深く結びついていた概念であることに着目し，従来のフェイス研究を補完するものとして，この情動面に注目することの必要性を指摘する。

第 3 章「フェイスの背後のシェイム（shame）と自尊心（pride）」では，第 1 章と第 2 章で共通して浮かび上がってきた，アイデンティティとフェイスそれぞれに密接な情動的側面を架橋するために，シェイムとプライドについての先行研究を概観し，本研究の研究設問を提示している。シェイムは「自分が拒否されたり否定されたときに伴う感情や失敗あるいは不十分さを残念に思ったり悔しいと思う気持ち」（p. 34）を指し，日本語の「恥」より広い概念であると考えられる。一方，プライドは，「自分の置かれた状況や自分自身を心地よく受け入れ自尊心を保っている状態」（p. 34）を指し，日本語の「虚栄」や「自惚れ」とは一線を画すという。対人関係において，シェイムとプライドのバランスを保つことは重要である。シェフ（Thomas J. Scheff）はとりわけシェイムを「支配的な感情」（p. 34）とし，その重要性を指摘している。これに加え，シェイムはその存在自体が日常生活のなかで認識されにくいため丁寧に見ていく必要がある。

以上の第 1 章からの先行研究のレビューを通して，① アイデンティティとフェイスには密接な関わりが指摘されているものの，両者はほぼ同義に扱われ

ることもあり関係性を解明する余地があること，② アイデンティティ調整については多くの関心が注がれながらも，それがどのようであるかのプロセス面にさらなる研究の余地があること，③ アイデンティティの調整においては情動的側面の重要性が示唆されることから，著者は以下の 2 つの研究設問を提示する。

研究設問 1：多面的なアイデンティティの調整にフェイス，そしてシェイムとプライド（自尊心）はどのような役割を果たしているのだろうか。
研究設問 2：フェイスとアイデンティティはどのような関係にあるのだろうか。

第 4 章「社会的カテゴリーとしての帰国子女」では，本研究が注目する「帰国子女」というカテゴリーに関する先行研究を概観する。1970 年代から今日まで，あらゆる角度から当該分野の研究が蓄積されてきた。教育環境の整備，心理的適応および逆適応の助力，言語能力に関する研究，イメージに関する研究，アイデンティティをめぐる研究などである。特にイメージに関する研究においては，マスコミによる帰国子女のステレオタイプ的な取り上げ方が注目される。実際には，帰国子女といってもひとりひとりの経験は異なり，十人十色である。日本帰国後の逆適応において帰国子女たちは，制度的な困難にも直面するであろうが，周囲が抱く画一的なイメージとの間に葛藤を抱いたであろうことも想像に難くない。特に社会に出た元帰国子女については，研究が少なく補足していく必要があることが改めて確認される。

第 5 章「調査（第 1 期）：大学生としての帰国子女」では，2000 年 2 月から 2001 年 7 月に当時，大学生だった帰国子女 22 名の協力を得て実施した調査の方法と結果を報告している。調査の手法は，①「私は（　　）である」という文章の空欄を埋め，文章を完成させていく The “Who am I?” test（WAI），② 調査参加者の枠組みで経験を理解しようとする際に有用で，質的および量的研究のハイブリッド型としての特性ももつ PAC 分析，③ 時間，場，人とのかかわりの面で多面的にデータ収集を行った参与観察（非構造化インタビューを含む）の 3 つである。すなわち，3 つの質的調査法を盛り込んだパラダイム内方法ト

ライアンギュレーションとデータ・トライアンギュレーションの両者を満たす設計となっている。

WAI テストの結果，調査参加者は全員，帰国子女であるにもかかわらず，必ずしも全員が帰国子女をあげたわけではなかった。調査参加者があげるカテゴリーは，社会的アイデンティティ，個人的アイディティ，超越的アイデンティティに類型されるものだけでなく，個人の特性や性格のメタファーまで多岐にわたっていた。特に注目される三者を事例として，データ分析と考察がなされている。明らかになった点のうち，紙幅の関係で主だった 3 点を以下に示す。

第 1 に，親和フェイス，能力フェイス，自律フェイスは複雑に絡み合っている。三者は相互に調整されるだけでなく，ある種類のフェイス・ニーズが満たされることが，別の種類のフェイス・ニーズを満たす条件となる，などのようにより複雑な関係性にあることが明らかとなった。第 2 にフェイスの意識が強い場合，フェイスを脅かすような事態を事前に避けようと行動することがある。フェイスの見えにくさが改めて確認されている。第 3 に，人はフェイスを脅かされたとき，その時に感じたシェイムに正面から向き合うことでアイデンティティを強化させるが，迂回した場合にはアイデンティティの強化にはつながらない。すなわち，フェイスはアイデンティティへの思い入れの指標として捉えることができるのである。

第 6 章「調査（第 2 期）：社会人となる帰国子女と社会人になった元帰国子女」では，第 1 期から 10 年後の 2010 年 3 月から 2011 年 10 月までに実施した第 2 期調査の概要と結果を報告している。調査参加者は元帰国子女 8 名である。調査手法は，第 1 期とほぼ同じで，時間的制約により参与観察を行わずにインタビューのみ実施した場合もあった。データ分析から明らかになった点を前章と同様，3 点に絞って示す。

第 1 に，ここでも三つのフェイス・ニーズの複雑な関係が明らかにされている。たとえば，ひとつのフェイス・ニーズが高揚されすぎると，他のフェイス・ニーズが脅かされることにつながることもあるという。第 2 に，フェイスが脅かされるとき，アイデンティティ調整はシンボルを調整することによって行わ

れることもあるということである。帰国子女にとって英語は本人が好むと好まざるとにかかわらずシンボルとしての働きを担う。その英語力の出し方によってアイデンティティの調整を行うのである。第 3 にこうしたアイデンティティの調整は，自己のフェイスが脅かされる時だけではなく，他者のアイデンティティが侵されることが予測される場合にも行われることが明らかとなった。すなわち上司や同僚のフェイスを保つために，帰国子女のシンボルである英語力を潜在化させるといった調整行動である。

第 7 章「アイデンティティ調整におけるフェイス（面子）・シェイム・プライド（自尊心）」では，第 5 章・第 6 章で明らかになったアイデンティティ調整のメカニズムを俯瞰した後に，第 3 章で示した研究設問に対応させる形で纏め上げ，結論および今後の課題を述べている。アイデンティティとフェイスの関係，アイデンティティ調整におけるフェイス，シェイム，シェイムとプライドのメカニズムは以下の 7 点に集約される。

主張 1：フェイス（面子）は個人がある特定のアイデンティティに思い入れをもつ指標である。

主張 2：自己のフェイスが侵害されるあるいは脅威にさらされたとき，そのシェイムに向き合うことでアイデンティティは強化される。

主張 3：自己のフェイスが侵害されるあるいは脅威にさらされても，そのシェイムが迂回されるとアイデンティティは強化されない。

主張 4：自己のフェイスが脅威にさらされずにシェイムを感じることがないと，アイデンティティは強化されない。

主張 5：自己のフェイスが侵害されるあるいは脅威にさらされるとき，シンボルが潜在化されるとアイデンティティは弱まる。

主張 6：他者のフェイスを侵害するあるいは脅威にさらす危険性があると，自分に伴うシンボルを顕在化させて他者のシェイムにつながるアイデンティティを弱める。

主張 7：あるカテゴリーのアイデンティティに関わるフェイス（面子）が侵害

された（潰された）ときのシェイムは，別のカテゴリーのアイデンティティでは払拭されない。

続いて結論が研究設問に呼応する形でまとめられている。研究設問 1 の多面的なアイデンティティの調整のメカニズムは以下のとおりである。人はシェイムとプライド（自尊心）が調和している時にはその存在に気づかない。そしてフェイスが刺激を受けず，シェイムを感じることがないとアイデンティティも強化されない（主張 4）。ところが，両者のバランスが崩れたとき調整を試みるわけだが，自己のフェイスが脅威にさらされたとき，そのシェイムに向き合うことで，アイデンティティは強化される（主張 2）。そのシェイムが迂回された場合は，アイデンティティの強化は起こらないし（主張 3），当該のシェイムは別のカテゴリーのアイデンティティでプライド（自尊心）を取り戻しても払拭されない（主張 7）。また，自己のフェイスが脅威にさらされるとき，シンボルを潜在化させてアイデンティティを弱めることも明らかとなった（主張 5）。さらに他者のフェイスを脅威にさらしてしまうことから，自分に伴うシンボルを潜在化させ，アイデンティティを弱める側面も確認された（主張 6）。特に最後の主張 6 は，これまでの先行研究のなかで理論の射程に入っていない新しい発見といえる。

研究設問 2 については，フェイス（面子）を個人がある特定のアイデンティティに思い入れを持つ指標と結論づけられる（主張 1）。シェイムとプライド（自尊心）のインパクトの強さが，アイデンティティへの思い入れの強さを示していると考えられる。

本研究では，調査を通して，アイデンティティとフェイスの関係性を捉えただけではなく，複数のフェイス・ニーズ間の相互作用と調和プロセスについても浮き彫りにすることとなった。すなわち親和フェイス，自律フェイス，能力フェイスの力動である。このことは，今まで文化的志向として解釈されてきたフェイス交渉理論にも見直しを提案するものとなろう。

今後の課題として著者は三点をあげている。第一に，フェイスが機能しない

場面についての分析である。第二に，フェイス・ニーズとモチベーション，特に外的誘因との関係を探求することである。第三にフェイス・ニーズをグループダイナミクスのなかで捉える試みである。

本書の貢献

本書は広範かつ精緻な先行研究のレビューから，従来の研究に欠落している部分，見直しが求められる部分，さらなる検討の余地がある部分を丹念に紡ぎ合わせ，鋭い研究設問を導き出している。特に従来，欧米の発想を中心であったアイデンティティ研究の領域において，東アジアの研究者による知見，実際の共同研究から得られた成果を融合させている点が注目される。さらにそこから理論的背景，対象とする現象の特性，従来の研究の欠落部分の補完を加味した上で，合目的的に調査の内容とプロセスが設計されている。調査の結果については，調査協力者の主観的意味を丁寧に描きつつも研究者の視点で既存の理論の中に文脈化させ，理論的な貢献へと昇華させている。本書の貢献は多岐にわたるが，ここでは学術的意義と社会的意義について論じる。

本研究は個人がもつ複数のアイデンティティ調整のメカニズムを明らかにした点でコミュニケーション学の理論的拡張に貢献している。具体的には以下の4点である。

第1に，これまでアイデンティティと密接でありながら，明確な区別がされずに扱われてきたフェイスについて，「フェイスは個人がある特定のアイデンティティに思い入れをもつ指標である」と両者間の関係性を明示したことである。アイデンティティへの思い入れの深さは，ある時は脅かされ，またある時は高揚するフェイスの振れ幅と連動する。このことは，たとえていえば人は単に複数のアイデンティティをカードのように持つのではなく，質量をもった存在として捉えるイメージにもつながる。末田氏によるこの知見は，アイデンティティ調整をよりよく説明することに有益であるばかりでなく，社会的アイデンティティ理論そのものの見直しにもつながっていく可能性を秘めている。

第2に，アイデンティティ調整において，シェイムとプライドという情動的

側面に着目し，より詳細な調整のメカニズムを提示したことである。これは従来，アイデンティティ調整をルールやストラテジーとして扱ってきた異文化コミュニケーション研究に新しい視座を提供するものとなろう。異文化コミュニケーション研究ではアイデンティティ調整を文化志向で説明づけようとする研究が多かった。本研究からの知見はそれを正面から否定するものではないものの，かつて文化的志向として解釈されてきた現象について情動的側面の調整，フェイス・ニーズの調整の観点から見直しを迫るものとなる。またアイデンティティ調整における情動的側面の重視は，感覚が麻痺してしまうような「巻き込まれ」やドメスティックバイオレンス研究等で明らかにされている「パワーとコントロールの関係」に置かれた人のアイデンティティなど，これまであまり研究の対象とされてこなかった領域についても研究の射程に組み込まれていくことが予測される。

第 3 に，アイデンティティ調整に他者のフェイスへの配慮が関与していることが明らかになったことである。これは，実際の事例の記述を見ても，知見として抽象化された記述を見ても，従来の理論でこの観点が欠落していたことが不思議に思えるほど納得させられる。検定などの手続きによって結果の妥当性が担保できない質的研究では，その記述を目にした第三者が「言われてみれば確かにその通りだ」と納得することによって結果の妥当性が担保されるという。「他者のフェイスを侵害するあるいは脅威にさらす危険性があると，自分に伴うシンボルを顕在化させて他者のシェイムにつながるアイデンティティを弱める（主張 6）」はこの意味においても妥当性の高さを示していると言えよう。この知見もアイデンティティ調整のみならず，社会的アイデンティティ理論・自己カテゴリー化理論の理論的拡張に貢献していくであろう。

第 4 に，方法論的貢献である。まず，本研究では，ふたつの形態のトライアンギュレーションが用いられ，現象をより多面的に捉えることによって調査結果の信憑性を高める努力がなされている。ひとつ目の形態は，複数のデータ収集法を用いることによる方法論トライアンギュレーションであり，本研究においては，WAI テスト，PAC 分析，そして参与観察を含めた非構造化面接法の

3つの異なるデータ収集法が使用されている。もうひとつの形態は，調査協力者に対し異なる時間，場所，または状況においてインタビューまたは観察を行うデータ・トライアンギュレーションである。さらに，方法論的貢献として特筆したい点がもう一点ある。それは，本書における研究アプローチがこれまでのアイデンティティ研究やフェイス交渉研究で頻繁に用いられてきた量的研究を主軸とするものから，プロセスの解明により重点を置いた質的研究を主軸とするものにシフトすることによって，文化やカテゴリーによる違いを所与のものとする本質主義的な研究のあり方から脱却している点である。

本書が果たす社会的貢献も大きい。第1に，私たちがメディアなどからの情報によって知らず知らずのうちに人々を特定のカテゴリーにくくり，ステレオタイプ的な見方を無批判に再生産していることがもつインパクトへの内省を促す。本調査の協力者のなかにも，「帰国子女として括られたくない」思いを持ちながら，一方でたとえば国際結婚家族に生まれたダブルの人に対し固定観念を持って語る場面がある。本書に登場するひとりひとりが互いに全く異なる個性をもった個人として紹介されているものの，読み進むにつれ，一方で何びともカテゴリー化やレッテルから完全に無縁ではありえず，むしろそうした他者の存在があるからこそ己を問い，アイデンティティ調整が行われていくという普遍性にたどり着く。帰国子女である人，帰国子女研究に関心がある人はもとより，自己と他者の関係を見つめ直す糸口を求める人すべてに本書はメッセージを投げかける。

第2に，本書はグローバル化における社会変容，人材育成のありようや国際言語としての英語を考える人，実際に多様な文化的背景を持つ児童生徒に日々向き合う教育現場に携わる人にも多くの示唆を与えるであろう。本書の中で直接触れられてはいないが，社会で活躍する元帰国子女は大学生である現役帰国子女より多くのプレッシャーや，周りからのレッテルに葛藤し，時に負のサイクルに陥ってしまう事例も報告されている。これを学生と社会人という身分の違いや責任の度合いで当然のことと一蹴することもできよう。一方で，目下，日本政府は「仕事で英語が使える」ひいては「グローバル人材」の育成を産官

学協働ですすめているわけだが，英語力と直接結び付けられる元帰国子女は，英語力がさほど高くないと自認している場合にはシェイムを感じ，かといって英語力を持っている人が，それを忌憚なく発揮するような環境にあるとは必ずしも言い難いようである。人材育成は人材活用の土壌があってはじめて相乗効果を生み出す。これまで過小だった元帰国子女への追跡調査は私たちの社会が抱える新たな問題について多くの示唆を与えるものとなっており，今後，発展的に調査が蓄積されていくことが期待される。加えて，実際の教育現場はすでにあらゆる文化的・言語的ルーツをもつ児童生徒が共に学ぶ場である。本書に登場する帰国子女および元帰国子女のそれぞれに固有の思い，それに向き合う著者の姿勢から現場教員は多くの示唆を得ることができよう。

さらに本書は日本語で書かれた学術書であるが，*Negotiating Multiple Identities: Shame and Pride among Japanese Returnees* と題する英語版が Springer 社より 2014 年 5 月に刊行されている。英語版では認識論，方法論，研究手法，帰国子女研究のレビューにおいて増補した内容となっている。日・英語版のいずれもアイデンティティやコミュニケーションの研究者はもとより，世界の日本研究に携わる人々にとっても必読の一冊となるであろう。

むすび

本書はコミュニケーション学者の末田清子氏が長年の研究から積み重ねた成果のエッセンスを纏めている。本書に示されている帰国子女あるいは元帰国子女の声は，紙幅の関係から，得られたデータのほんの一部であろう。それでもなお，調査協力者の深遠な意味世界が丹念に描かれており，理論を扱う学術書ながら調査協力者の人となりが実に身近に感じられ，読むものを引きつける。こうした豊穣なデータの背景には，もちろん著者が丹念に精査した研究アプローチや調査手法によるところが大きいだろう。「帰国子女」というカテゴリーありきではないアプローチへのこだわり，10 年を経過した後での「元帰国子女」を対象とした追跡調査，パラダイム内方法トライアンギュレーションとデータ・トライアンギュレーションを盛り込んだ調査設計などである。そうした堅実な

調査設計が示唆する方法論上の学術的貢献については先にも指摘した通りである。

こうした点に加え，本研究の底支えをしているもうひとつの要素に触れて本稿のむすびとしたい。それは，調査者の調査協力者に対する教師としての深い信頼と愛情である。著者は冒頭で往来者としての研究者の立ち位置を明らかにしている。すなわち時に調査協力者の主観に寄り添い（イーミック），またある時は研究者として冷静な分析をするという立場（エティック）である。その往来を可能にするものは調査者としてのスキルの問題とも言えるかもしれないが，同時に調査者自身の複合的なアイデンティティ調整の実践そのものとも言えよう。本書の分析のなかで，特に参与観察や，元帰国子女とのインタビュー場面において，冷静な観察者のまなざしによる分析が展開されていく一方で，その背後に通底している暖かなまなざしに気づかされる。それは末田氏の教育者としての教え子に対する信頼と愛情からにじみ出るものにほかならない。本書の豊かな知見は，調査者の大胆かつ明晰なイーミックとエティックの立場の往来が，調査対象者への信頼と愛情という一貫した錨によって支えられていたことから生み出されたと言っても過言ではなかろう。